

No.34 June 2002 (最終号)



Womanpirit



フェミニズム・宗教・平和の会

もくじ

女と国家―観念による呪縛

B 三つ巴の性(三)

無力なる宗教と女性

「寺族問題」という問題

専業主婦は三極化?

Oさんへ カムサヘヨ

水色の夢・暖かい風・目に浮かぶ涙

「フェミニズム・宗教・平和の会」の休止に際して

さあ、これから

生きること

閉刊に寄せて

これからという時、解散は残念

それでもLate comer は夢をみる

閉刊に寄せて

会のゆるやかな継続のために

――「森の学校」のことなど

節目のときに

草創の頃のことなど

「フェミニズム・宗教・平和の会」解散にあたって

「フェミニズムと宗教」に関わる会・個人の紹介

河野 信子	1
小松加代子	2
熊本 英人	5
下村美恵子	9
申 英子	13
山下 暁子	17
牧 律	25
たかはしとしえ	26
勝又 美保	27
花崎 正子	28
斉藤 七子	29
黒木 雅子	29
川橋 範子	30
千葉 悦子	30
宮澤 邦子	32
岩田 澄江	35
奥田 暁子	36
「フェミニズムと宗教」に関わる会・個人の紹介	39

女と国家―観念による呪縛

B 三つ巴の性 (三)

河野 信子

老婆 医術（あるいは医道）の場の人びとが第三の性の人たちを、普通の女・普通の男に限りなく近づけようとしておられますことを、壮大な意味の追求と思い続けてはいます。しかしそこには、第三の性の「不幸」の側にだけ寄り添おうとするものがあります。

若い女 試行錯誤のなかには、正負両面がございましょう。実験動物ではなくて、ヒトを対象としているだけ、限らないアポリアに直面していくことではございませぬ。

老婆 医道にまつわる批判は、私どもの手に負えることではありません。さしあたっては、人類の歴史のなかで、人は第三の性と、どのように共生して来たかを、考えてみましょう。片利共生や片害共生ではない双利共生となるような歴史上の実在をと念っています。

若い女 第三の性の人たちが苦悩とともにひとりひとり消去されてしまわない道として、インド社会にヒ

ジュラの人びとがあります。（『ヒジュラ 男でも女でもなく』セレナ・ナンダ著 蔦森樹十カマル・シン訳 青土社、一九九九年参照）この本は、インドには「男」「女」「ヒジュラ」の三つのジェンダーがあるかどうかの問いかけから出発しています。ジェンダーといった言葉が使われていますことに注目してくださいませ。ここでは第二三染色体にまつわる事実を曖昧にして、ジェンダーもセックスもすべて「ヒジュラ」とあつかわれています。

過去に関する限りこれでよかったと思います。

老婆 曖昧もまた価値ある存在であり、基本となる論理だということですね。ヒジュラびとは、男役割・女役割をランダムに超える働きをなさっていますか。
若い女 そうは言い切れませぬ。歴史のなかで、人がランダムネスを体現するのは、それほど許容されたことではございませぬでしたから。

セレナ・ナンダは、ヒジュラの人びとの正負両面を、妥協を許さぬ「文化人類学的調査」のもとに書き込んでおられます。

この本からは、私自身のジェンダー概念を再考すべき事態が起ち上がっています。

彼女は、いままでのヒジュラの「文化的定義」と実在との喰い違いをあげています。要約しますと、

(1)慶事を執り行う者とされるが、この役割で生計が

成り立つ者はすくなく、多くのヒジュラは他の仕事を
している。

(2)多くのヒジュラは女性としてのジェンダー・アイ
デンティを持っていて。

(3)ヒジュラのほとんどの人は「両性具有者」ではな
い。

(4)ヒジュラの全員が去勢手術を受けてるわけではな
い。

(5)多くのヒジュラは男性と性関係をもち、売春に
よって生計を得ている。

第三の性にとつてのランダムネスとは何かを、歴史
のなかで模索する試みはいま始まったばかりです。

老 婆 生命体とは何かを、発生の初期から未来にわ
たるまで問い直したい気分です。ジェンダーをめぐる
私の思考も硬直していました。

夜も更けてまいりました。いまから『ムーンスター・
オデッセイ』（デイヴィット・ジェロルド著 小隅黎・
松本薫訳 サンリオSF文庫 一九七九年）を読み直
しましょう。この本では三種の性への深い洞察が、愛
とともに造形されています。

（未完のまま本稿に休止符を打ちます）

無力なる宗教と女性

小松加代子

宗教は女性にとって価値あるものであり得るのかと
疑問に思っていた私は、一九八三年にイギリスに行っ
て、Matriarchy Groups と出会いました。日本に戻っ
てきて、女性と宗教との関わりを考える集まりを探し
て、このフェミニズム・宗教・平和の会と出会ったの
でした。

Matriarchy Groups の人々は、古代の社会では、大
地は女性として崇められ (Earth Goddess, Mother
Goddess, Great Goddess)、生の象徴であったと考えて
います。その社会とは、力を持った神秘的なものとし
て自然を崇拜する社会で、女性は今よりも政治的にも
精神的にも権威を持ち、階級社会ではなく、ヒーリン
グが多く行われ、生殖の過程への崇敬があったとされ
ます。そうした社会を侵略し破壊した人々が持ち込ん
だ宗教がキリスト教であるということです。

キリスト教が登場する以前に、母権制・母系制社会
があったとする考え方は、今から言えば、女性の特性
論や生物学的決定論に組してしまいそうなものである
ことが分かりますが、あの時の驚きは、女性であるこ

とを肯定することがそれほど新鮮だったということでもあります。言い伝えや想像から、自分たちで新しい儀式を作ったり、祈ったりすることが許されること自体、新しい経験だったと思います。

女性の生殖への関わりが、男性には経験できない始原的で、崇高な役割を女性に与えられていると考えることは、女性に生まれたものには可能性が開かれないう点で、生物学的決定論に陥り、男女役割分業を強化するとして批判を受けてもいますが、女性が宗教とどのように関わっていくことができるかを考える際、おもしろい視点を与えてくれると思います。

まず、女性が中心となる社会が平和で自然崇拜の社会であったとする考え方は、単なる家父長制の裏返し思想なのではないかと言われることについてですが、女性にとって（少なくとも一部の女性にとって）大きな利点があることは忘れてはならないように思います。

女神崇拜が提示する女性性の肯定は、既成宗教の中で語られる女性の特性論とは異なる部分があります。それは母としての存在以前に、自立した個人としての存在が魅力を持つていることです。この点で、キリスト教のマリアがイエスの存在なしには語れないこと、また処女であることの可否が関わってしまうことと比べるとはつきりと異なることが分かります。完璧に

聖化されてしまつて人間離れしてしまつたマリアと違い、破壊もする女神には、モデルとしての親近感もあります。最初に述べたように、私自身もこうしたグループの存在に大いに勇気付けられた経験を忘れることはできません。それまで肯定できなかった女性であることが、パワーを持つて現れてきました。女性がエンパワーされる経験を生み出している点で、簡単には否定できないものがあります。一度そうした考え方と接すると、既存宗教の女性像の魅力のなさが浮き上がってきます。

男女の性差を強調し、女性らしさを上げつらうような特性論とは異なる点があることは重要であり、自立した女性というモデルが今まであまりにも少なかったことを考えると、そうした女神の発掘・創造は大いなる価値があると思います。それは多神教、あるいは民俗信仰のようなものだと否定されようとも、こうした女性のエンパワーメントを経ることは、一神教の神学を考えるとときにさえ深い思索の糧になるはずだと考えます。

しかしながら、そうした女神信仰は男性にとってどのような価値があるのかを考えると、やはり問題が生ずることは否めません。ただし、それは男性の問題ではないかとも思えます。

男であることだけで安住の場所を得ていた男性は、

その特権自体が、対となる弱い女性がいたからこそ意味があったことに気づき始めました。男性であることの心地よさから降りようと試みる男性は、自らのアイデンティティのなさに呆然とし、また、生物学的決定論から未だ降りようとしない男性は、自らの危機的状況を社会の危機と見なし、男らしさの復権を唱えています。もちろん、新しい荒波を避けて、今までどおりの生活を選ぶ女性もいますが、そうした女性にはそれ以外の道を選ぶ女性が見えています。しかし、多様性に開かれていない男性は、今までどおりの男としての人生行路を離れ、権力とは直結しない新たな道を切り開いていかなければならない困難さの前で戸惑っているように思います。そうした男性にとつては、女神信仰はエンパワーされるものとはならないでしょう。

これは宗教に限りません。女性は抑圧されたものとして活動してきた中で、自らのアイデンティティを問うことをずっと行ってきました。女神信仰もその一つと言えるでしょう。また、女神信仰に違和感を覚える女性も少なくありません。既成宗教の基本的思想の中には女性差別をしない思想がもともあり、組織も教義も改善が可能であると考える人々もいます。宗教をめぐるところした二つの流れは女性に分裂が起きたのではなく、多様性が求められた結果だと考えられます。女神信仰でさえ、その信仰を他者に強要するときには、

そのパワーを失うでしょう。

ニューエイジの思想や、宗教とは呼び難いグループの登場、そして様々な新宗教の登場は、選択肢が増えたことと考えてもよいのではないかと私は思っています。組織が大きくなれば、どうしても組織の統率が必要となり、そこに権力構造ができあがります。多くの信者を抱え財産を所有すると、利害が生じます。そう考えると、私自身は大きな組織に属する気持ちにはなりません。宗教性・スピリチュアリティを求めるならば、大きな組織の中の個人か、あるいは小さなグループ、新たな固定化されないグループの中に見つかるのではないかという気がしています。

ただしこうしたグループは社会的な権力と無縁です。その意味では社会的な背景をもった安定した組織にはなり得ません。圧力団体にもなれませんが、政治的・社会的な役割を果たせないという点で、逃避行動であるように見えるかもしれません。しかし、やはり宗教は権力とは無縁であるべきだと思います。むしろ、そうした中で人は生きていけるのか、アイデンティティの危機に対応できるのかを考えることが、私の今の課題です。

「寺族問題」という問題

熊本 英人

寺族とは何か

「寺族(じぞく)」という言葉は、一般の国語辞典には載っていない、仏教界独自の用語である。

一言で言うと、「寺族」とは、「寺院に生活する、僧侶の家族」である(ただし、浄土真宗系の宗派を除く)。「寺院(じてい)」と言う場合もある(「寺院」は、大きな辞書なら出てくるが、「寺族」のような意味はない)。これは、僧侶の婚姻が許された、明治以降の造語である。

そもそも、僧侶の婚姻が許されたとは、どういうことか。

明治五年四月、明治新政府は、「僧侶の肉食妻帯勝手たるべし」という布告を出す。本来、出家である僧侶は、戒律によって、肉食、飲酒、性行為(婚姻関係も含む)などを禁じられていた。江戸時代までは、この禁を破った者は、寺院や宗派からだけでなく、幕府から厳罰を受けた。ところが、この布告によって、それらが解禁されたわけである。この布告は、「妻帯」

という言葉からもわかるように、男性僧侶を対象とするものであったが、翌年には、女性僧侶(尼僧)に対しても同様の布告が出されている。(注2)

この布告が出されたことで、僧侶たちは進んで結婚するようになった、というわけではない。そもそも、戒律を守るということは、仏教を信仰する者にとつてのルールであるから、本来、国法による認可不認可など関係ないはずである。事実、各教団の上層部や、指導的立場にある僧侶たちは、この布告に従わず戒律を守るべきことを説き、また、政府に対しても同様の抗議を行っている。

しかし、この布告によって、刑罰の対象にならなくなったこともあり、男性僧侶の婚姻は加速度的に増えていき、それと同時に、寺院相続の世襲化が進むことになった。各教団は、出家主義(戒律主義)のたてまえを固持しようとしたが、明治末には、ついに教団としても黙認せざるを得ないような状況になっていたのである。

その後、僧侶の配偶者の保護について、遺族年金などの制度を各教団とも検討し整備していくこととなり、今日に至っている。ここでは、曹洞宗の例を中心に、寺族、特に男性僧侶の配偶者に限定してみている。

寺族とは何者か

実は、ここにおいてなお、各教団は、出家主義のたてまえを捨てたわけではない。たとえば、曹洞宗の憲法である現行の「宗憲」には、第八条に、「本宗の宗旨を信奉し、寺院に在住する僧侶以外の者を「寺族」という」とある。そこには、配偶者という言葉も、家族という言葉も使われていない。もちろん、配偶者以外の家族も含む、という理由付けはある。しかし、配偶者であれ子供であれ、この条文からは、僧侶と寺族は家族との関係は何も定義されない。しかも、寺族が存在する原因であり、戒律に反するはずの僧侶の婚姻についての規程や解釈はどこにもない。

そもそも、この条項自体、一九九五年になって新たにできたもので、それまでは、寺族は、根本法たる「宗憲」には存在しないが、下位の法規の「曹洞宗寺族規程」や「曹洞宗寺族年金規程」などにのみ存在する立場だったのである。

現実に存在する男性僧侶の配偶者たちは、曹洞宗教団においては、不可視の存在なのである。先にみたような歴史の流れの中で、男性僧侶の配偶者の存在が表面化したのは、明治末期から大正期にかけて、寺族の保護といったことが教団内で公に語られるようになってからのことである。それまでは、教団もその存在を

黙認するのみであったし、僧侶の婚姻をめぐる賛否は、明治五年の布告以来、結論を見ない論争としてずっと繰り返されてきた。僧侶の配偶者は、教団にとつても寺院にとつても、あくまで非公認の存在だったのである。

俗語で、男性僧侶の配偶者のことを、「大黒さん」と言う。これは、神仏に比して尊重した呼称なのではない。「妻」「奥さん」と呼ぶことを憚った隠語なのである（こちらの言葉の女性的な是非は今はおく）。地方によつては、「おばさま」「あねさま」などという呼称さえあるのである。

寺族の誕生とその歴史は、男性僧侶の立場の変容が生んだものを、当初から今日に至るまで、不可視なものに留め置く歴史だったのである。

何が本当の問題なのか

曹洞宗教団において、しばしば「寺族問題」ということが語られてきた。

ところが、問題とされたのは、見てきたような、寺族の不可視性や、それに基づく被抑圧の問題ではなかった。

教団が問題としていたのは、寺族の資質や、相続問題、年金問題など、男性僧侶主導の寺院経営に関わる

問題のみである。そのことは、先にあげたような規程や、寺族のための教育制度などをみれば明らかである。

中心的課題としてあげられるのは、住職退任（死去）後の、その配偶者である寺族の去就についてである。寺院住職というのは、たいていの場合、宗教法人の代表役員であり、もし仮に、後継者となるべき子供がいなにか、幼少など何らかの理由でその資格がない場合、住職退任（死去）に際して、責任役員でない寺族には、寺院に対する何の権利もなくならないことである。もちろんそこには、ある程度の権利の保護策や一時的措置もある。しかし、（乗っ取りまがいの事例も含めて）寺族をめぐる寺院相続の問題は、憂慮すべき問題として現実に少なからず存在する。

だが、さらに深刻な問題は別にある。

一つは、寺族の問題を語ることで教団の再構築を図るかのごとく振る舞う植民地主義者たちの存在である（拙稿・川橋範子氏と共著「弱者の口を借りて何を語るのか―仏教界の『女性の人権』の語りをめぐる』『現代思想』第二六巻第七号参照）。

もう一つは、寺族の問題を問題化するにあたって、「持てる寺族」が「持たざる寺族」に対してあらゆる面で優先され、その結果、あたかも「持てる寺族」の利権確保が寺族問題の本質であるかのごとく捉えられることである。そこには、仏教の相続に名を借りた利

権主義と、寺族間における男性僧侶のヒエラルキーの再現という二面が確かに存する（同前「転換期の寺族問題―新しい寺はどこにあるのか」『中外日報』二〇〇一年四月一七日参照）。

しかし、最大の問題は、寺族の不可視性であり、そして、それを不可視なものたらしめている男性僧侶のアイデンティティーなのである。

まつさきに必要なのは、寺族の資質やその生活の充実感ではない。あるいは、寺族の老後の補償の問題でもない。教団が、寺族の存在をきちんと認め、定義し、宗教的役割分担を明示する。それなしに寺族問題を語ることは、不可視の存在をますます不可視にすることに他ならない。

そして、そこで問われているのは、出家主義というたてまえに何のためらいも持たない、根拠のない自信に満ちあふれた男性僧侶たちのアイデンティティーなのである。

寺族を不可視にすることで支えられ、葬式仏教と批判される現実に教義（宗教的真理）をすり寄せることで支えられ、そして、そのような作為によつてのみ支えられているに過ぎない自分たちのアイデンティティーに何の疑いも持たないことにこそ問題があるのである。仏教教団内部での独善的な改革は、教団外部には何の説得力も持たない。少なくともそこには、仏

教の未来はない。

〈注1〉浄土真宗系の宗派は、宗祖親鸞聖人以来、男性僧侶の妻帯と世襲を原則としており、他宗派でいう寺族という立場はない。浄土真宗系教団では、男性僧侶の配偶者を「坊守（ぼうもり）」と呼ぶが、ここにもまた寺族問題と似た構造の問題が存する。『仏教とジェンダー』（朱鷺書房刊）参照。

〈注2〉女性僧侶（尼僧）の問題は、機をあらためて論じたい。問題点だけ指摘しておく、明治六年の布告にもかかわらず、女性僧侶（尼僧）は、仏教上の理由よりもむしろ仏教的ジェンダーとでもいふべきものを受けて、自ら出家主義を守ってきた。にもかかわらず、男性中心の仏教教団において、男性僧侶よりも下位に位置づけられ、さらに、同じ教団内の女性である寺族との軋轢さえ生じている。しかも、一部の女性僧侶は、仏教的ジェンダーを再生産していると言わざるを得ない場合がある。これもまた男性僧侶中心の仏教教団が作り出した大問題である。

〈付記〉日比野由利氏は、『Womanspirit』三三三号で、弱者の立場に置かれている者に対して語りを強要することについて、弱者が直面する現実的な怖れへの配慮のなさを指摘している。その論理自体に間違いはないが、私は、弱者に語りを強要したのではなく、また、語ろうとしてもその前に（僧侶と寺族との）夫婦関係の安定が優先されるといふような事例をあげて、抑圧の解消への具体的運動の多難さを指摘した。その後、参加者の寺族の方からも、同様の事例が紹介されたのであって、私への異論が挙がったのではなく、私自身が問題の両面を指摘したということであり、ご確認願

いたい。

同時に問いかけられた、私自身の男性僧侶としてのアイデンティティーについて、明確に回答することはできないが、少なくとも、常識を前提としない、権威に頼らないという生き方（研究も含めて）において示したいと思っている。もちろん、出世間という意味での出家とはなりえないけれども。

なお、本稿で批判的に論じた曹洞宗も含め、仏教界には、主体的に仏教の再構築と取り組もうとしている僧侶（男女）も寺族も坊守も信者も数多くおられることを誤解なきよう指摘しておく。

*本稿は、「フェミニズム・宗教・平和の会」二〇〇一年一月二三日の例会における報告「近代仏教における女性の位置―僧侶の婚姻をめぐる諸問題」をもとに、新たに書き下ろした。

専業主婦は三極化？

下村美恵子

「専業主婦」をテーマにした自治体の連続講座を「また」引き受けてしまった。昨年も別のところで引き受けて、そのときはもうやるまいと決心したのに、断わることができなかつた。というより、喜んでまた「いいですよ」と言ってしまった。きっと今度は新しい展開があるかも知れないと期待をして。やっぱりこれが性差別構造の象徴的な制度であることを考え合ってみたいため…。

「専業主婦向けに専業主婦問題に関して」というと、ハナからそんなことやつていられないとお断わりになる「講師」候補の方がいる。自治体の謝金は薄謝だし、けつこう遠かつたりして移動にも時間がかかる。昼間の午前中にくる受講生なんて、どうせヒマな主婦たち…ナニを言つても歯が立たない不動の精神で主婦業を謳歌している…。

そんなところに行つて話をするなんて、ムダだ。主婦フェミニズムの片棒なんかかつぎたくない、好きで主婦やっている人にとやかく言うことはない、自分の生き方は自分で決めると、まあ、そんな理由が当たたら

ずとも遠からずである。担当者が〇〇さんに依頼した
が断わられて…とポロツとこぼすことがあつて、私は
二番手、三番手だつたと知ることもあるが、ナニ、そ
んなこと構いはしない。

さて、確かに専業主婦には歯が立たない、と思うこ
とがある。が、それはおおむね、すでに生き方の変更
ができない、またはそれを諦めた中高年の専業主婦た
ちには当てはまる部分があるけれど、若い専業主婦た
ちは自分の生き方を模索し、子どもを預けて学ぶ新鮮
さや、公園では交わせない会話ができる知的な空間・
時間を貴重なものとして学習会場に通つてくるし、感
想文などもきちんと書いてくる。

私は主婦という制度が歴史的文化的社会的に作られ
てきたものだという、真正面からの問題提起を必ずす
る。酷かも知れないが「他者に依存して生きる存在」
ということをはつきりと伝える。自分と社会の位置関
係の確認という客観化も試みてもらうので、自分のあ
りようが論理的に整理されていくのですつききすると
いう若い主婦たちに対して、中高年の主婦たちは猛反
発してくる人が多い。

私がもうやるまいと思つた理由は、せつかく社会の
構造や女性問題やジェンダーの核心に迫つてきたとい
うのに、中高年主婦たちはその確認が共感される関係
をかき乱す発言を、終始一貫続けるからである。つま

り彼女たちの「自己ガード」に付き合わされるシンドサ、それならこんなところに来なければいいのにと
思うのだが、結局彼女たちも満たされていない日常生活を送っているから来るのだと思う。

少しでも批判めいたことを言う和不快感を表して行くこともあるし、子育てを立派に成し遂げた自信や生活の心配がない安定感からか、世の中に起きている青少年のいろいろな問題行動は家庭がしっかりしていないからだと、暗に母親役割の欠如を「断罪」して行くこともある。

だからと言って、そうした「問題発言」を排除することはできない。問題発言を引き取って果たしてそうかどうかを考えて行くというのが、私に課せられた仕事だからである。攻撃的にならず、さりとして問題発言をまあまあと見過ごすことなく、周囲にも問題を問題として理解してもらおう、そこがシンドい。だが、それゆえ多少でも理解や納得を示してくれることもあるから、再び三たび引き受けてしまうゆえんでもある。

では少し具体的に紹介してみよう。これは講座以外の場所も含むいろいろなところで私が直接耳にしたことのある、専業主婦たちの声である。

「私は周りから専業主婦と呼ばれたくない」「子育ては自分がしたい。生活環境も自分が整えたい。苦勞して

もそれが幸せだ」「私は自分で調達できるものはすべて自分でしている。子どもの洋服や家族の衣類など」「台風がきて大荒れの日も、私は家に居られて幸せだ」「専業主婦も年金の保険料を支払えという考え方は納得できない。保育園の子ども一人に税金から何十万と出ている。家で子どもの面倒を見ている専業主婦は保険料の免除は当然である」「女は我慢がたりない（三組に一組の離婚というデータに）」「収入があるから自立しているとは思わない。主婦の貢献度は理解が得られない」「働きたい人だけが働けばいい。私は家族のために専業主婦をしている。家には必ず一人の家事専従者がいないと回っていかない」「共働きの人が眠そうな子どもの手を引いて帰ってくるのを見ると、子どもが可哀想だ」「主人はいつもお疲れ様と言ってくれる。働いていたときより顔つきが優しくなったと言われる」「半径ゼロキロメートルという狭いところで、その場その場の人間関係で評価される自分だと気がついた。子どもという守るべきもののためにそれが我慢できる」「いつも狭い範囲にしかないから、本当の自分を出す勇気が出ない。仮面をかぶっている自分にストレスを感じる。家事をしながら育児、育児しながら別のこと、いくら気持ちの切り替えをしても、完全に家のことから自分を切り離せない」「近所に同じくらいの子どもを持ち、同じくらいの大きなお腹をし

て、いっしょに歩いている人がいた。同じでないとい
や、そうしないと安心できない、取り残されたくない、
とても考えているのだろうか私はおかしいと思ってい
る」「こんな雇用情勢では専業主婦願望を持ちたくな
る」「公園デビューという言葉は嫌いだ。どの程度付
き合えば本音で話せるのか、相手の出方を伺い、心の
探りあいをし、真に迫るとバリアを張って、踏み込ま
せない、踏み込まない。でも公園に行かないと、子ど
もの遊び相手がいなくなるのではないかと不安に感じ
る」「家庭は憩いの場だと思う。相手の給料が良くて
働く必要がないから専業主婦になった。転勤の時は単
身赴任させたくない」「私は働きたかったし夫も賛成
していたが、結婚したら変わってしまった。仕事は当
然辞めるべきだと言われ、仕方なく辞めた」「母が仕
事を持っていて、子どものころ寂しい思いをしたので、
自分の子にはそうさせたくなかった」「時間に縛られ
なくてよいし、自分を必要とする家族がいる」「人が
暮らす上の基本的なところを支えている専業主婦は、
女性として立派なプロの仕事だ」

こうして女性たちは自分の立場を雄弁に語ってい
く。だが私は女性たちがそう考えていることを「苦笑
して見ていたくない」という気持ちが強い。専業主婦
でなくても、職を持っている女性たちも、あるいは若

くても高齢でも似たような感覚で生きているのに多く
出会う。また、女性問題に精通していると自認してい
る女性たちがその状況を生きているということもまた
多くて、これは夕チが悪い。

なによりも、こうした声の背景に存在している男性
たちの家庭生活への距離の遠さや、妻たちの我慢や我
慢を押し込めて自らを納得させている姿が押し量られ
てくる。男たちは何をしているのだろうか。何を考え
ているのだろうか。

女性の状況が大きく変わってきた部分があるとして
も、まだまだ変わっていない部分は相当あると思う。
専業主婦でも都市部と地方ではその様相は異なる。周
りに人が多くても希薄な人間関係に悩み、濃密な人間
関係で暮らしてもそのうつとうしさや慣習に悩ん
でいる。また当然ながら前記のように声に出して思い
を表明できる女性たちばかりとは限らない。

先日も訪れたある東北の女性がしみじみ述懐してい
た。十数戸の村に結婚して住んだという妻たちがごく
最近まで自律神経を病んだり、精神的に追い詰められ
て自殺したり、家出をしたりというのが何件かあった
という。妻たちの合言葉は「早くこの家から出たい」
なのだろう。まだ昔ながらの家意識や嫁姑間の確執
が拭いきれていないと言う。

専業主婦は昨年比九万人減少しており、毎年減り続

けて現在一一五三万人である。ただし、専業主婦とはそれをさすのか、ひとくくりには出来ない。この数字は第三号被保険者数の最新のデータだが、厳密にはこの数字の三分の一はパートタイムに従事している。ほかにはやむなく育児や介護で拘束されていたり、引き受け手のいない地域活動に関わっている専業主婦もあるだろう。何かと「ヒマでしょ」と皮肉られがちな専業主婦はそう多いとは限らない。

別の調査で、その調査を実施した担当者も驚いていたが、専業主婦をしている女性たちは「家事が犠牲になっても収入の多い仕事につきたいと思うか」との設問項目で、肯定の回答率は最低ランクだったという。ボタン一つでお風呂が沸き、洗濯ができ、ご飯が炊けても、家事・育児は女の仕事と考えるのか、確かに家事・育児に関わる時間の夫と妻の国際比較では、日本は話にならないほど夫の関与時間が極端に低い。また専業主婦の満足度というのも朝日新聞の一昨年調査で六〇％を超えている。

先駆的な女性行政を進めてきた千葉県のある市で、何年ぶりかで市民三〇〇〇人を対象にアンケートを実施したが、女性の四五％強が、性別役割分担を肯定する結果だったと言っていた。これは数年前に実施したときとほとんど変わっていないとのことだった。いまは「仕事をする」ということが女性の生き方の当然の

選択肢の一つになってきており、そちらにシフトして晩婚・非婚もいとわなくなった女性たち、早々と専業主婦になり子どもを生み育て、時には鬱屈したりしてもそれでいいとする女性たち、また専業主婦の規範から逃れて、生き方を変更して自己実現していく…少なくとも自分のやりたいことをするためにはその分くらいはしつかり稼ぐ女性たち、この三極化が割合はつきりしてきたのではないかと思う。どちらにしても一度は働いた経験があり、職場や社会の状況やお金を稼ぐことの意味も認識していると思え、その上での「選択」である。

また最近では配偶者控除や扶養手当の廃止、年金の保険料負担など、政・労・使が積極的に専業主婦優遇政策を見直す動きに転じてきた。少子高齢の進展もあるが、男女共同参画社会基本法の成立とも無縁ではない動きだと思う。多分これから論議を呼ぶと思うが、男性一人の稼ぎで子どもの教育費、家のローン、妻の扶養（これを山田昌弘は夫たちの抱える三大不良債権と言っている）は、大変だ。

仕事の能力とは別に諸手当の費用がかかる既婚男性は企業にとつても重荷となり、そうした人は採用されにくくなるのではないか。現に進んでいるリストラは、よほどのエキスパートでなければ、会社にとって負担の大きい中高年対象に起きており、今後も雪崩を打つ

て押し寄せてくるだろう。

専業主婦に、「好き好んで」そうした危機感を伝えるに、またレジュメ作りに励んでいるというのがこの原稿を書いた時点での私である。「親切な行為」となるか「袋叩き」に遭うか、立ちはだかる壁の厚さにまたまた目の前にザアッと黒い雨が降るかも知れないと思う。でもこんなお節介をする人はほとんどいなくて、「偉い方」は決して引き受けないし、引き受けても本音で迫っていないことが多い。

ある市で実施された学習記録を読んだら、「お洒落する心を忘れていませんか」「一日の使い方」などのタイトルで有名作家が講演していた。その中に少しでも「ジェンダーフリーエキス」を混ぜていつているのだとしたら、それはかなり高度な力量を有していると思う。そのようなことのできない私は愚直に問題提起し、その結果嫌悪感のシャワーを浴びて帰ってくる。

その時でなくても、はるかに時間が経過した後で納得してもらえることが少しはあるのではないかと、そこにも期待しているけれど、専業主婦問題は「永遠に不滅」なのだろうか。不滅にさせてしまう男性たちを早期発見、早期治療したいところだが、それにはやはり妻たちの「異議申し立て」が必要だ。

〇さんへ カムサへヨ

「フェミニズム・宗教・平和」の会が一六年も続いたとは本当に驚きです。最終回と聞いてとても寂しかったです。この会が発足した一九八六年のその頃は丁度自分の中にもゆらぎが起きて来たときでもあり、〇さんたちとの出会いが、それからの歩みの先取りのような示唆を与えてくれたと思っています。この場を借りて〇さんをはじめこの会を支え、導いて来てくださった方々に、心よりお礼を申し上げます。

「フェミニズム・宗教・平和」の会はいわば、この地上という荒波の中で漂流している小船が嵐をくぐり抜けて、港にたどり着く、一種の憩いの場であったと思います。自分の生活の場で「怒りと情熱とエネルギー」（メアリ・デイリー）を必要としていた者にとつては同じ思いではなかったでしょうか。

ゆらぎと申し上げましたが具体的には、

・フェミニズムとは（イズムである以上これも「主義」？）

・宗教とは（わたしにとって縁深い「キリスト教」とは何？）

・平和とは（自分の心にほんとうの平安がないまま一般的に「平和」を語るとは？）

を考さえることが多くなっていました。その最さなか中で「人の裏切り」というより「人」とはどういう存在であるかを知らなかった故に起きた事件から、心因反応を起こし、多くの人々にご心配をお掛けしました（一九八八）。つまり女性であること、同じ信仰を持つ者、外に向かつての平和を訴えるということは、確かに自分にとって安心のキーワードでありましたが、ほんとうはそこに落とし穴があり、それを十分に検証しないと、むしろ底無しの空しさがパツクリと口を開けていることに気づかされたのです。

続いて在日韓国・朝鮮人の足かせになっていた「指紋押捺」反対の運動の流れの中で、日系三世のロン・藤吉氏の日本政府に対する「同化政策反対裁判」の証人として、横浜に住みつつ大阪高等裁判所で二度にわたり、証言台に立つという経験をしました（一九八九）。傍聴席の大部分は在日の同胞でしたが、証言内容について「あれは申 英子だけの話ではなかった」と自分の歩んで来た日々と重ねて聴いていた皆が後ろで泣いていたと言います。証言の中で、すべての人に「愛する権利」が保障されているはずなのに、在日韓国・朝

鮮人にはそれを禁じている日本政府の罪は裁かれるべきだということを言いました。鮮明に覚えていることは証言台に立ちつつ自分史を語る中、辛かったこれまでの自分と亡き母親との確執の清算が出来たと心から思えたことでした。

三〇歳で夫（私の父）を住み慣れた北海道の小樽で急病で亡くし、長女の私を頭に三人の子供を連れて大阪へ移り住み、文字どおり夜も寝ずに働き詰め、結核とガンを患い数年前（一九八四）に昇天した母への思いが堰を切ったように溢れました。母自身彼女の母（わたしの祖母）の胎内にいるとき三・一独立運動の犠牲者として祖父の兄たちの無念な死を経験しています。異郷で心を開いて語る人も無く差別と生活苦と孤独と闘った母の一生を思い出しました。悲しい在日の差別と抑圧の歴史を「自分」の場から語る中、今までここに重くのしかかっていた、そのときは既に亡き母への思いを証言台を降りて直ぐ、陣痛のような心情の中で次のように書き留めました。なぜ母があれほど私にしがみついていたのか（私の結婚式に報復自殺をするのではないかと、式に出ずに弟が自宅で付き添っていたこともあり）、臍へらげに分かつていたつもり彼女の苦悩や悲しみを、改めて、生きること全部が「同化」を強いられたそれであったと理解できました。天に帰った母にほんとうにご苦労様と言えた時でもあり

ました。と同時に自分は「生まれ直した」気分になりました。とても人の前で発表できるものではありませんし、今まで誰にも言ったことがありませんが、〇さんへの手紙だからこそ聞いてください。

亡き母を偲びて立たん梅新の地に

三代に渡すなかれ「同化」の苦

弁護士が産婆とまごう裁判の朝

亡き母の恨（ハン）を解かまし梅新の地に

オモ二が重荷となりし謎とけてげにうれしや梅新

の朝

*梅新 大阪高等裁判所があるところ

かなり前のことを話してしまいましたが、誰であれ個人の歴史において、母親との関係こそ見直され清算されるべきもので、それをしないと実は前に進めないのではとしみじみと思うのです。

最近、この大阪での開拓伝道が一〇周年を迎え、少し落ち着いて回りを見直すことが出来るようになりました。その中で人は誰でも母、あるいは母なるものとの関係の取り直しが必要であることを実感しています。「神」あるいは自分自身との折り合いは、取りも直さず自分の母や父との折り合いの仕方からも来ているのですから。なぜならば愛という美名のもとで執着

愛、依存愛との区別が曖昧なまま、人は自分の人間関係を結んで行く性癖を持つものだからです。

古い話をしてしまいましたが、四月末に実に思いもよらなかつたことが起きました。私が一九六八年から七〇年まで名古屋の在日のある教会で伝道師（牧師という正教師になるまえの補教師）をしていたころ、高校生や青年会員であった人たちが平日にもかかわらず九名が大阪で集まることができました。目下ロスアンゼルスに住んでいて久しぶりに日本を訪問することになった女性が、皆に呼びかけ短期間に連絡をとりあい、その結果旧交を暖めることができたのです。米國、豊橋、名古屋、京都、神戸から大阪に集まったのです。実に三二年ぶりでした。高校生だった一番若い女性が四九歳であとは五〇代半ばです。もちろんそのうちの何人かとは数回会っていましたが、私にとつてはその内二人は本当に三二年ぶりの再会でした。昼食を共にして夜の九時に別れるまで、一人ひとりのこれまでの、それぞれ山あり谷ありの人生を語っては聴くというだけの集まりでした。でも皆が実に生きていてよかつたという感激に満たされました。その中のK子は自分がガンに侵され、近い身内にも明らかにしていない闘病の様子と期せずして体験した神秘的なできごとを幼なじみのようなこのグループに語って

れました。またM夫は妻のガンとの現在の共闘について語り、M雄は父母が日本と韓国とに別れていたため、父親が日本で別の家庭を持ち、自分が若いとき従業員として父親の町工場で働きつつも親子の名乗りを数十年間できずにいたこと、在日として韓国は遠かったのに長女がある出会いから、むこうで保育者として働く望みをもつて留学しているという話など。九人中私を除いても二人がキリスト教の伝道者で二人とも、精神の病に罹っている人たちと深く関わりながら（作業所を形成または施設で働いている）、教団では変な牧師とみられつつ牧会をしています。私は二〇代後半に二年間という短い交わりだったのに、このように時空を越えて、これまでと今の人生をこころを開いて分かち合える幸いを感謝しました。

来る六月の半ばには高校三年のクラス会が四〇余年ぶりに開かれます。みな還暦を迎えたので、と案内には書かれていました。そう、もうこんなにも越して来たのだなと思います。またどんな出会いが待ち構えているか楽しみです。

苦しいこと悲しいことがいっぱいあってこそ人生ですが、二一世紀には、だからなおさら、「フェミニズム」「宗教」そして「平和」はとおり過ぎせない課題

です。いやこう言い換えます。人類が二〇世紀まで、前の二つの課題とどう取り組んだかわれ（つけはもう十分についている）ると同時に二一世紀は「平和」と真剣に取り組まねば地球の存続すら難しいという現実が迫っています。先の三二年振の再会の仲間の二人の男性牧師はわたしがみるところ「フェミニズム」「宗教」の課題を真面目に実生活の中で生かしています。だから最も弱い立場の人の傍らに立てる強さをもっているのです。このような人々が「宗教」（＝ラテン語で再結合という意味）に係わるのは安心ですが、「フェミニズム」の真の意味を問わず「宗教」にかかわることとは決して「平和」に結びつかないのではと思うのです。あらためて「フェミニズム・宗教・平和」という言葉にバンザイ!!

最終回になつてしまったこの冊子の続きはそれぞれが現場で織り成す人生に綴ることなのです。好きなタゴールの詩でこの手紙を終えます。

「危険から護られるよう祈るのではなく、恐れることなく、直面しよう。

わたしの苦しみの納まることを願うのではなく、それを克服する心をこそ願おう。人生の戦場で同盟軍を求めのではなく、われわれ自身の力をこそ求めよう。

救われることを心配しながら求めるのではなく、わたしの自由を勝ち取る忍耐をば望もう。

わたしが、自分の成功のためのみにあなたの慈悲を当てにする卑怯者ではなく、わたしの失敗のなかにあなたの手の握りを発見する勇者でありますよう。」

ラビンドラナート・タゴール（「果物採取」より）

二〇〇二年五月十二日 母の日に

申 シン
英子 ヨンジャ

水色の夢・暖かい風・目に浮かぶ涙

山下 暁子

解った！ やっと。あー、そうだったんだ。あーあ。やっぱり私はほんとに、すぐくずれてる。知識も不足。はー。何より覚悟が無かった。この社会、この教会で異議を申し立てる時の。あれって内部告発だったんだもの。

「自分の場所で発言出来なければ、ちょっと辛いわ

ね」という編集会議の後の雑談で何回か聞いた奥田さんの言葉。いや、私はこのように言われたと覚えているのだが、奥田さんは、違う言い方、違う言葉を使われたかもしれない。でも、この原稿では敢えて奥田さんに問い合わせず「私の記憶の中の言葉」として書かせて戴くことにする。

で、そう言われた時の私は、「そうですよね」。勿論解っているつもりだった。でも、今、解る。ぜーんぜーん、ぜーんぜん解つて無かったな——って。

一九九九年に入会した。入会からたった三年しかたっていないが、入会の一年を含めてのこの四年間が私の人生で一番辛く、重い時期だった。辛くて、悲しくて、寂しくて、死にたかった。それまでは、何があっても元氣印と言われていた私だった。そしてその元氣印の万能薬だったものこそ、七歳の私が母の亡くなる二カ月前に病室で一緒に受けた洗礼に始まるカトリックの信仰。それまでは人生に何が起ころうと、全てOK。だって「神さまの決めて下さった人生」だったのだから。そう四〇年以上そう思い続けていた私が、「あれ——、神さまどこ？。チヨ—危機。わ——、どうしよう」という大混乱状況、大落ち込み状態で入会した。「そういうことはね、フツーは二〇代、すぐく遅くて三〇代で考えるのよ」とよく言われたが、でも、仕方

ない。それが五〇代の私だった。

死にたかったと書いた。でも、それを実行するとは思っていなかった。私の娘は今元氣な二〇歳の体育大生だが、白血病の経験者だ。彼女の長い病院通いや入院で出会った沢山の子供達の苦しみ、死。それに出会っている私が本気で自分で死のうとは思えなかった。だから、死なないですむ為に、この会で信仰を建て直したかったのだ。フェミニズムと宗教、を考える人々の会。こんなに私にびつたり会の会があったなんて。この私が社会でも、教会でも一番ひっかかっていたのに、正視する余裕も無かったのが、女性差別だったから。正視したら自分の生存が危うくなると思って避け続けていた大問題だったから。

そして、入会からの三年たった今、やっと私は元氣になった。会からも沢山のを与えられたと感謝している。会報の編集をするようになって、奥田さん、小松さんを初め色々な方々と話すことが出来た。原稿依頼では時にはいやな思いもしたし、相手の方にもそういう思いをさせてしまったと思うが、一方ではそれによって長い電話や手紙、メールで新しい見方、考え方を与えられた。考え方が、人間関係でダイナミックに変わることが出来るのだと実感したこともあった。多分多くの方にとっては大変当たり前のことなのだろうが、落ち込んで苦しむまでの私は役割だけで生きていて自分の感情に向き合っていなかったから、私自身が貧しくて、そういうダイナミズムのある人間関係が持てなかったのだと思う。

また、考え方が違う時に叩かれてむっとしたこともあったが（相手の方もそう感じられたでしょう）、考え方が違うのに、お互いに理解したり、共感出来るというダイヴァーシティな感覚を得られたのもすごく楽しい思い出になっている。

平嶋さん、平野さん、岡村さん、千葉さん本当に有難う。特に、岡村さん、素晴らしい原稿を辛さを乗り越えて書いて下さって有難う。書かれたものは必ず残ります。

「内部告発」

私が苦しかったのはこれだった。そして、同時にそれがフェミニズムやフェミニズム神学と格闘された方々の困難さだったのだ。今頃解るなんて本当に遅いけど。いやほかのフィールド、例えば家庭でも、会社でも、演劇でも、文学でも、色々な形で格闘している人々の苦しみが、自分のいる場所で発言することだからこそ一層困難であり、いっそのこと目をつぶってしようということになるといっそのことがやっと解ったの

だ（再び思う、ほんとに遅いけど）。

私の問題に戻ってみる。女性や信者が、家庭で、社会で、教団で、教会で、友達、知人の中で「ああ、何かこういうのは変。変と言いたい」と思う。見回せば、ほかの人々もそう感じていると思うが、ただ言っていないだけだ、ということもうつすら解る。で、自分は言おうと思う。しかし、言葉を口先まで出しかかつて考えると、ほかの人が言わない理由が解る。だって、言ったって何も良いことは起こらない、それどころか、きつと言えば、非難、無視、軽蔑が返ってくるだろうと賢い人には解るのだ。

「ばーか、当たり前じゃない」。会員の皆様のみならず、世の中でフェミニズムに関心のある方は、二世紀になって、それも五〇過ぎて、こんなこと言ってることに、ただただ呆れられると思う。でも、フェミニストの皆様、これなんですよ。日本にフェミニズムが育たないのは。フェミニストの皆様はそういう社会と立派に戦っていける方々なのだ。勿論、言われると思う。「私達がどんなに苦しみ、どんなに大変な戦いをしてきたか」と。でも、戦い抜かれたのです。それが御出来になったのです。でも、日本では、普通の人には大変過ぎることなんです。フェミニズムを意識し始めたとして、若くてお利口なら上手に避けると思う。中年になってやっと口に出すことが出来ても、あまり

の大変さにすぐ元の生き方に戻る聡明な人は多いと思う。いや口に出しても、ばったり倒れて、元の場所によろよる戻る人も多いと思う。

幸い、私はばったり倒れてよれよれになっても何とか元の場所に戻らずに済んだ、と思う。本当にあらゆる限りの、一生分のパワーを出し尽して（ああ、疲れた。でも偉かったと、ちょっと自分を褒められる）ずるずる地面を這って、泥まみれ、血まみれになりながらも、何とか、フェミニズムが救ってくれる場所までたどりつき、やっと手を届かせられたと思う。（小松さん、いつも励ましてくれて、有難う〜）

でも、フェミニズムと縁遠い普通の社会で生きてきた私は、女性の生き方を強要され、苦しいまま亡くなっていた友達や友達のお母さん達を沢山知っている。亡くならなくても精神的に落ち込んだまま、家事以外のことをする気力が無くて生きている人だってこの日本にはまだ沢山いる。精神的でなく、身体的な病気になって自分をやっと救っている人だっている。

金子珠理さんが会報二二号に書かれていた。「男社会で働くのも地獄であるが、かといって家庭に入っても孤独のうちに子育てをするのも地獄である」。書いていても涙が出る。地獄なんて本当にいやだ。でも、「この社会で目を覚ますのも地獄、覚まさないで生きるのも地獄」とも言い変えられると思う。女性として生き

ることを、少しでも地獄でないようにするには、もつとフェミニズムが日本にひろがらないければ、本当に駄目なんだと思う。

日本でフェミニストと自称出来る方々は、素晴らしい能力と努力と、そして、敢えて申し上げますが「運」があつたのだ。フェミニストとしてこの世で生きるパワー、努力する力、能力、性格、場所を与えられているのだ。勿論、そういう力がありながら、自分達だけが安全な場所にいる曾野綾子さんとか長谷川三千子さんなどの、優しさ皆無の方々とフェミニストの皆様は全然違うと解つた上で書いています。

そんなことを考えていた私は、会報三三号の曰比野由利さんの「男性僧侶のアイデンティティー」という文章に、「おお」と感動させられた。曰比野さんは仏教の教団内で抑圧されている女性達に声をあげて欲しいという、多くの人が抱く当然な思いを持たれながらも、また、こうも考えられると書かれている。声をあげられない人々は、抑圧を感じていないはずはなく、しかし、もし声をあげれば「自らの生活の基盤を失うことを覚悟しなければならぬ場合すらある」し、教団内で「嘲笑や妨害を、覚悟しなければならぬ。時には、それによって心身に深刻な緊張を強いられることすらある」と。「弱者が直面しているこうした現実

的な恐れを、相対的に強い立場にある者は日々、感じなくてすんでいます。そして、そうした特権的な高みから事態を眺めた時、敢えて異議申し立てをすることをせず、寡黙にいきる彼女たちの選択を、過小評価する危険が出てくるかもしれない。その結果、彼女たちを『家長制の積極的協力者』あるいは、よくて『家長制の犠牲者』などと表象してしまうことで、かえって家長制に加担してしまうことになるかもしれない。」

曰比野さん、これからも期待しています。

女性学者やフェミニストと自称できる方々は、ここが少し（少し、ってちゃんと解つてます）楽なんです。差別を対象化できる場所がありなんだから。もちろん、その方々は、そういう問題が自分の問題として苦しいからその分野の研究者になられたんで、大きな苦しみを乗り越えられたと解ります。でも、なれたんです。でも、普通の人の多くにとつては、社会、宗教の中の女性差別を対象化なんてとんでもなくて、一〇〇パーセント自分の問題として生きるか一〇〇パーセント避けるかの道しか無いのです。生き抜ける人は少なくとも、また、それが解っているから目をつぶってしまうんです。今の日本で、単に「女性が男性の下にいるのはおかしい」と正視することでさえ、自分の首を自分

で絞めるのと同じだもの。

フェミニストの間では、批判を受けているのかも申しないけれど、私は遙洋子さんという人の出現を北原みゆりさんに続いてうれしく思っている。遙さんの『東大で上野千鶴子にケンカを学ぶ』にはそれほど感銘を受けなかったが、そのあとの『結婚しません』『働く女は敵ばかり』『介護と恋愛』が、本当にすごいと思った。北原みゆりさんの本を読んだ時も同じようなことを感じたが、違いは、北原さんが突出してフェミニストとして特別な職業で生き抜こうとされているのと違って（それもととても大変だが）、遙さんはタレントというこの世にどっぷりはまった仕事の中でフェミニストとして発言されていることだ。また、遙さんが賢く、恵まれているのは、フェミニズムと社会の対立を、自分と家族の対立、という大変解りやすく納得出来るかたちで書かれていることだ。ここまで戯画化された形で描かれるのを許す家族を持たれたのは、彼女の幸運であるし、また、きつと家族の方々もこの社会の差別を理解しうる（その為に利用されることをよしとされる）方々なのであろう。（ここで、娘を有名にするためには利用されてもよい家族なのでは、なんて、程度の低いこと言わないで下さいね。本を読まれば解ります。もう一つ、上野千鶴子さんの宗教観を問題視するのはいいけれど、フェミニストとしての姿勢を攻

撃するのもやめて欲しい。フェミニスト同士の争いなんて、もったいなさ過ぎる。戦うべき相手は他にあるのだから。）

遙さんの本で、私は、ああ、こう感じて苦しんだのは、私だけでは無いのだとどんなに慰められたことか。なぜなら、今、多くのフェミニストが書かれたものは、私の苦しみなど「もう過去のもの」と言われているように私は感じていたからだ。私が言われて、苦しみ、落ち込んだ「今の世の中は頑張れば、女性だからなんて差別は受けない。あなたは認識不足か環境が悪い」「単にあなたの能力不足だったのでは」。まるで私だけが時代錯誤の能力不足のわがまま人間としか扱われていなかったことは、私をどんなに疲れさせたか。そう言われながら何の反論もできず（だって、言えば、今度はヒステリー、僻み、更年期って言われるから）、どんなに痛めつけられたことか。遙さんの本では、それが、まだ彼女の世代でもこの世の現実だと書かれていたから、私は救われたのだ。

たとえば『働く女は敵ばかり』（朝日新聞社）にはあるテレビの討論番組についての次のような言葉や思いが書かれている。

「がんばらない女性も悪い」「仕事やめる女性が悪い」「今の社会では女性でも頑張れば何でも手に入れられるのに、できない女性は、その人が悪い」「女が不幸

なのは、男運が悪いのか、家事が下手だから」。また、「私個人の問題じゃないと思う。社会の問題だと思おう」と答えると「被害妄想だ」「君、不幸なんだ」「いい男いるからさ」「そんな絶望しないで」と言われる時の絶望感。

私を感じて、言われてきたことが今も全然変わっていない。何を言っても「個人的問題に還元されてしまおう」のが、まだまだ日本の普通の社会なのだ。

この番組ではないが、たまたま遥さんが出たテレビ番組を見た。七人での討論形式の番組だったが、やっぱり全員が遥さんを攻撃していた。最初はそういう番組の作りで、遥さんはどこかで救われるのでは、と見ていたのだが、みんな真面目に、心から（！）攻撃していた。司会者、男性二人、何も言わないアシスタントの女性は除外しても、ゲイを表明されているタレントのOさん、女性評論家のKさんという差別を経験されてきたに違いないはずの人達までが「あなた昔は良かったけど、フェミニズムを勉強した今は駄目になったわね」と何が良くて、何が駄目なんだか解らない言葉まで使って最初から最後まで彼女を攻撃しているのには、ぎょっとした。権力を持つと人は変わるのか、或いは、その人々は最初からそうだったのか。でも、これこそが、まだ日本の今の社会の現実だ。

こんな社会の中、自分のしていることが、内部告発

だなんて全然解らず（女性学やフェミニズムの知識が無かったから）、ただ、長い人生にくたびれてしまった時、「これって何となくやだなー」という感覚だけで発言し行動してしまった。男性中心の社会で、また、男性中心で権威的なカトリック教会で。支えてくれる理論も友人も無く内部告発してしまっただけから、叩かれたら即ダウンだったのだ。が、ダウンしてもこの会に、フェミニズムにたどりついたのは、幸せだった。

どこの場所であっても「内部告発」をする人間にはすごい非難の圧力がかかる。だからこそ、奥田さんは、自分の立っている場所こそ発言しなければならぬし、シスターフッド、つまり友達が友達を支えることが必要だと言われていたのだ、と今になってやっと解る。

と言うわけで、この四年の落ち込みの間、何とか生きる気力を得る為に、神学講座を受け（岡野治子さん、有難うございました）、フェミニズム神学やフェミニズムの本を読みまくり、フェミニズム心理学を学び、この会の方々と劣等感一杯ではあっても話し、という間に、やっと私は元気になった。というか自分の限界が解って納得できたこと、また、カトリックの信仰に對して自分なりの理解が持てたから元気になれたように思う。

すでに一九八七年の会報第一号には、カトリック教会の女性差別の問題の全てを、宮澤邦子さんは「カトリックとフェミニズム」と題して書かれている。宮澤さんと言えば、余計なことを一つ書かせて下さい。宮澤さんと一緒に発題した例会。その為に私は必死に勉強（！）しなければならず、忙しくて、多分、一生に一度のお金儲けのチャンスを逃しました。ほんと、その時は私を発題者に指名された奥田さんを恨みました（奥田さん、今頃こんなこと言っでごめん下さい。引き受けたのは私なのに。そして、良かったのです。うまくいっていたら、再び私は家長制下で目をつぶって生き続けたでしょう。今のようになんか元気になれなかつたでしょう。）

その例会で宮澤さんが話されたのは書かれ、また、編集された「イギリス女性作家の半世紀」についてだった。その五冊の題名はそれぞれ「女が問う、女が壊す、女が集う、女が語る、女が拓く」。私の苦しみにぴつたりで、ショックを受けた題名だった。この会に入会してからの私がしてきたことは、問い、壊す、集う、までだ。これからどんなにささやかでも「拓いて」いけるようになるだろうか。

元気にはなったが、一方、私は組織としてのカトリック教会というものに何の関心も無くなってしまった（あれほどしがみついていたのに……）。これから

考え直していくかもしれないが、今は、「あー、すごく疲れた。ちよつと信仰はお休み」という気分。これが、この会の終了を聞いた時、残念と思いい、この会が続いて欲しいのに、「私一人でも、一年に一度でも。ミニコミでも出し続けたい」と言えなかつた理由だ。

まだ解らないことは沢山ある。奥田さんの言われる「解放の力になる信仰」のあり方が解らない。アメリカの公民権運動など、社会の力学を変える時に教会の果たした役割の大きさは頭では（これも頭では）解るが、キリスト教の持つ、差別とのバランスやカトリックはどうだったのかと考えてしまう。宮澤さんの言われる「カトリックには素晴らしい霊性がある」も、女性差別やセクシュアリティの無視と、どうバランスがとれるものなのかが解らない。岡野さんが、カトリックの中で発言し続けられる信仰への信頼が解らない。

でも、尊敬するこの方々が、長い年月をかけて考えられ、得られたものを、落ち込むまでフェミニズムもフェミニズム神学も女性学も、系統立てて学んだことの無い私がすぐに解るわけが無い。これからずっと考え続け、問い続けたいと思う。

今年の三月はニューヨークにいた。ボストンのカトリック教会の司祭による子供への性的虐待が毎日報道されていた。三月一日は昨年「九月一日」事件

から半年目で、WTCのがれきからWTCの幻のように、二本の青い光が空を照らした。「九月一日」や司祭の児童への性虐待について書き始めるともっともっと長くなるのでやめておくと、ニューヨークに限ると(ちよつとニューヨークから離れると全然駄目だと思つた) 反戦デモには驚くほど多くの人が参加していたし、アメリカ人が攻撃される理由があると考へている若い人々も沢山いた。しかし、子供連れでデモに参加していた人々、善意の若い人々に期待しながらも、その人々でさえ、アジアやアフリカの苦しみが解るまでの距離がありすぎるとも思つた。

神さま、あなたほんとにどこにいらつしやるんですか？

聖週間のマンハッタンを一人で歩いていると、ちよつと信仰はお休み、と思ひながら静かな場所ですりたつた自分がいた。カトリックのセントパトリックカテドラルには以前には無かつた星条旗に小さな、小さな十字架がついた。ピンが売られていた。こんなものを平気で売る教会の神経。ばかだ、と思つた。星条旗と十字架の組み合わせ自体おかしいが、大きな星条旗、小さな十字架だなんて。反対ならまだしも。大変静かだったのでファイティン・アベニューの長老派教会で祈つてゐるうちにお昼の礼拝になつた。外は石造りで、中は木造の美しい教会の中で、パイプオルガンの演奏の美

しさを感じている私が出た。「ニューヨークでも昔はこの教会を初め、教会が一番高い建物でした。でも、今は商業や経済の為の建物の方が高いのです。その中でもワールド・トレードセンターは、その最も顕著なものでした。そして、それが、妬みや憎悪を呼び起したのです」。牧師さんのお話の一節。この当然のことを、キリスト教の人々はどこまで解っているのか。帰りに、日本から来たと握手までしたのに、そういうことを牧師さんに質問しそなたのが悔やまれる。

この苦しみ多い世の中を、何とか楽しく元気に生きて抜いていきたいと思つている。カトリックの教えに従順だつた時は、この世を幼子のごとく、純真に、従順に、喜びを持って生きよ、と言われ続けていた。それつて、この世が天国であつてこそ可能でしょう？でも、今の私は、この世は地獄だつてやつと(遅——い)解つたから(金子珠理さん、言葉にして伝えてくれておいて有難う) 攻略法も考へられる。負けないぞ。時には寂しくて、辛くても、苦しくても、もう何かや、誰かの犠牲になんかなくて生きない(犠牲、つてカトリックでは素晴らしいことだつたんです)。

今、フェミニズムは私にそういうパワーを与えてくれる。それが解つただけでも、この四年間あれだけ苦しんだ意味があると思へる。だからこそ、フェミニス

トであり宗教者であるという二重の困難を抱き続けてこの会が一六年も続いたことに心からの敬意を持つ。本当に有難うございました。

「フェミニズム・宗教・平和の会」の

休止に際して

牧 律

「フェミニズム・宗教・平和の会」という名前の冊子を私が初めて見たのは昨年の四月、東京ウイメンズプラザ資料室の書庫の小さな一角であった。

大学を卒業してまもなく結婚、それから約二〇年近く妻と主婦、そして子供ができてからは母親としての役割を担いながら、経済的に夫に依存し続けることに自分自身居心地の悪さを感じてしまう私はずっと会社社勤めをしていた。結婚した頃はまだフェミニズムも知らず、ジェンダーという言葉のもつ重みを感じるような体験も無かった私であったが、結婚後に直面した人生の色々なステージに於いて、否応無く社会的に抑圧される女性の性とジェンダーに向き合わされることになった。そしてそれは結婚前には想像もできなかった

ことばかりであった。

多分私が結婚してすぐに子供をもうけ、サラリーマンの夫と子供二人というような典型的な日本の家庭の主婦として納まっていたならば、これほどまでに強烈に自分の内側で抑圧される性とジェンダーについて突き詰める事は無かったかもしれない。日本という社会は極めて一般的な多数派の一人として生活するときには、問題意識を感ずることなくラクに生きていける多数派安泰の社会である。しかしそのパターンから生活が一步ずれたとき、例えばハンディキャップを背負った子供が誕生したり、夫とうまく行かず離婚の危機に瀕したり、また逆に夫婦円満でも不妊に悩んだりしているような人々にとつて、この社会は非常に生きにくい社会であることを私は骨の髄まで知らされることになったのだ。

苦しみ悩むときよく人は救いを宗教に求めると言われる。私はクリスチャンの家庭に生れ育ったが、子供の頃あれほど素直に受け止めていた聖書の言葉や教会の牧師さんの説教が思春期を過ぎる頃からちつとも心に響かなくなっていた。そしてそれらを受け入れられないことに対し、自分自身で苛立ち大きな罪悪感をも抱いていた。そのような私にとつて、宗教が自分の苦しみの救いになるはずもなかったが、その代わり自己決定しなくてはならないような人生の選択の時に必ず

私の中で、キリスト者としての物差しを出して決定して物事を推し量るといふ自分に気がついてきた。

そのような自分であるから、はじめてこの冊子に出会ったとき、この冊子が自己解放としてのフェミニズム、宗教、平和をクロスさせているところに大いに惹かれたのである。

惹かれるままに全部既刊の Womanspirit を購入し、すべてに目を通したとき、長年自分が気にかかりながらも苛立っていたフェミニズムや宗教について、こんなにも共感を抱ける人々が多く存在していてくれたのだという事実に感動していた。そのときから Womanspirit は私にとって心理的に連帯できる冊子となっていたのである。

この度「フェミニズム・宗教・平和の会」が活動をしばらく休止するとの連絡に際し、入会してから一年も立っていない者としてはこれからという時なのにと残念な思いで一杯である。日本に於いてフェミニズムや平和に関する活動をする団体はいくつも存在するがそこに宗教をクロスさせ意義を考えさせる会の存在をここ以外私は知らない。その事を考えると、活動は休止であって廃止にして欲しくないと心から願っている私である。

さあ、これから

たかはしとしえ

勿論、その時々を書き手の方に、広い世界へと勇気を持って入り込めるような気持ちにしていたが、とりわけ、河野信子氏のお書きになったことに触れることができたのは何よりの支えでありました。奥田暁子氏にもずいぶん助けられ、安心して自分の精神世界をささやかながら構築することができたようにも思います。

草の根、自らの足元、近所づきあいから始まり、同じ街に住む人々から全て発信する、という態度は発信当時から、今も、変わっていません。けれどハガキをいただくにしろ、冊子をいただくにしろ、郵便受けに届けられているからこそ、安全であったという気がしてなりません。

つい先日、私の家の道路に面した窓ガラスが、大人が遊ぶおもちゃの鉄砲で穴をあけられる、ということが起きました。それはすごい音でした。私のささやかな詩集を読んで、敵意を感じた者のしわざと思っています。地べた、市井の中からの発信は、このように危険が伴うものだと改めて思い知らされました。

私の住む所は、とりわけ保守色の濃厚なところで、私のように何の組織にも属さない者は、それだけで、「変人」扱いです。

ですから、今までの奥田氏のご苦勞たるや大変なことだったと想像します。ほんとうに、ねぎらいをさせていただかなければと思っています。

フェミニニストたちが、又、散らばる。そんな感想ともつかぬことを思い浮かべます。けれど、これからこそ、それぞれが、それぞれに「のろし」をあげる。「のろし」をささやかにあげている。そう信じています。さあ、これからこそ、女性解放のひとりとして生きる時間が与えられたのだと、決意を新たに致しております。みなさん、ほんとうにありがとうございました。

(二〇〇二年四月二二日)

生きること

勝又 美保

今から約一八年前、私は中学校の弁論大会で優勝した。タイトルは、「生きること」。要旨は「生きるとい

うことは生かされるということ。誰も一人では生きていけない。人は助け合わねばならぬ」というものだった。天理教の良き教えを懸命に信じきり、幼いながらも悩んだ末に達した一つの人生論だったのだと思う。これにより先生や親戚からは大いに誉められ、私は「よい子」を気取ることになる。しかし、それから約一〇年後、私は一変してしまふ。人より遅い自我確立期を迎え、二〇代後半になって不良娘になってしまったのだ。きつかけは海外生活。「日本人」という着物を剥ぎ取られ、「自分という名の仮面」も剥がされ、裸になった心で自分自身と直面せねばならない。生きることは何か、もう一度真剣に考え始めた。少女のころの「人は助け合うために生きている」という宗教人生論では自分は救われなかった。その苦しい模索の中で、私はフェミニニズムに出会う。思えば、本会との出会いもそんな一足遅れの青春の葛藤の時期にあった。しかし、フェミニニストを自称することに無理を感じ始めた今の自分にとっては、本会が解散してしまふことは、遺憾であると同時に必然的とも感じられる。

さて、青春を通り越して三五歳へ四捨五入できる年齢になった現在の私なりの人生論といえば、「人はなぜ生きるのか。それは生きるため。生きるために人間は生まれてきた」ということだ。こんな簡単なことが今までわからなかった。でももう過去のことはいい。

迷惑をかけてしまった人々にお詫びする気持ちだけは忘れずに、とにかく前だけを向いて生きていこうと思う。神の導きによつて、タイへやってきたのだと信じる私はこれからも「タイ」に疲れ果てることも折々あるが、「宗教と女性」という観点からは山積みの作業があるこの国で、自分の出来ることを精一杯行つていこうと思う。人のために生きられなくなつてしまつた自分は人とともに生きよう。ただひたすらに生きるために生きよう。「生きること」の意味を模索する上で、多くのヒントや励ましをくださった本会のすべての方々にも心より感謝したい。

閉刊に寄せて

花崎 正子

皆様の論文を読ませていただきますことを楽しみにいたしておりましたのに、この冊子が閉刊になると伺いとても残念に思っております。また、せっかく投稿の機会をいただきながら、「多忙」の一言に逃げ（現在二一時間／週担当しておりますが、それは理由にな

らないと思っております）、それも果たさなまま終わつてしまうことになりました。

私は短大に在籍しているのですが、世の中の変化・問題点が若い学生に年々強く映し出されるようになり、「これでいいのか」と、いつも刃を突きつけられる思いで反省いたしております。とくに実践科学を専攻する私にとりましては、理論と実践をどうつなぐのかの方法論考究もさることながら、その実践理論を私たち一人ひとりが自分の生き方のなかにどう取り込み、生き方いかに展開していくのが最も重要な課題の一つでありますので、それを若い学生たちにどう伝えていけばよいのか、日々思い悩まされているところです。しかし、問題の解決は、実は私たち一人ひとりの日常の具体的営みの中にあると考え、「学生とともに歩むしかない」と、時間はかかりますが、私なりに努めているところです。大それたことですが、もし私の社会的存在としての意義が少しでもあるとすれば、そのようなことではないかと張り切つて頑張っているところです。

皆様の論文を通し、「励まし」「力」をありがとうございます。皆様の今後のますますのご活躍をお祈りいたします。

これからという時、解散は残念

齊藤 七子

今まで協力らしい協力もしないでごめんなさい。けれどもいままでの蓄積がこれから大いに役に立つ時がくると思うときにやめるのはもったいないことですね。例えば各宗教のそれぞれの立場からの発言は希少価値がありました。

同じ宗教でも柱をどこに据えるかによって全く異なってきます。と同時に違う宗教であってもフェミニズムの視点から一致できる点、平和の問題では行動をとともにできるなど、相互に知り、理解を深める場を提供してきたとおもいます。

今、問題になっっている難民、亡命者の救済をどうするかについても、よそ者としてなるべく受け入れない方針をとってきた政府は、問題が起こってから周章狼狽し、取り繕っています。わたしたちの社会にはよそ者と共存し、異なった考え、思想の人々を受け入れ、相互に学びあう思想が育ってこなかった。これらの素地をつくってきた「フェミニズム・宗教・平和の会」がこれからというときに会を閉じることは残念でなりません。みなさまのこれまでの活動に心からの感謝を

おくりたいとおもいます。

それでも Late comer は夢をみる

黒木 雅子

「フェミニズム・宗教・平和の会」の存在は知っていたけれど、誘われて入会したのは最近のこと。Late comer にとつても解散は残念なニュースだ。このように一六年も続く宗教の枠をこえたフェミニズムの会は日本で見ないからである。この会の発足が、アメリカのフェミニスト宗教研究誌である Journal of Feminist Studies In Religion の出版開始一九八五年の翌年。すごい！当時の空気を関西のフェミニストたちの間で吸っていた私は、活字にならない女たちが共有した（と思われる）経験に思いがいつてしまう。宗教に対するフェミニストサークルの非親和的まなざし、宗教サークルにみられるフェミニズム嫌悪、「宗教とフェミニズムの不幸な結婚」があった（る）中で、「フェミニズムと宗教と平和」を全面に打ち出し活動してきた会の挑戦とそれを担ったパイオニアたちに敬意を表した

いと思う。そしてこの会が解散しても部分的連帯を可能にする同志のネットワークの可能性を夢みて……。

閉刊に寄せて

川橋 範子

「フェミニズム・宗教・平和の会」を知ったのは、八〇年代の終わり、まだアメリカの大学院で毎日暗く勉強していたころだったと思う。当時はたしか源淳子さんもこの会で活動していらして、彼女にお願いして入会した記憶がある。それからあつというまに一〇数年がたち、今の私は地方の大学で理系の学生相手に宗教学と文化研究を教えている。その間、フェミニズムと宗教の問題に正面から取り組む人々が集まるこの会は、たえず私に勇気を与えてくれていたように思う。まさに奥田先生、岡野先生をはじめ、中心になってこの貴重な活動にエネルギーをそそいで下さった方々には頭の下がる思いでいる。

フェミニズムも宗教もともにマージナルな存在になりがちな日本で、この会はまさにハイパーマージナル

であったのかもしれない。だが会報をたどってみれば、実は非常に質の高い内容的に深みのある活動だったことがわかる。この会をきっかけに、数年前には仏教とフェミニズムに関心をもつメンバーが、「女性と仏教 関東ネットワーク」を立ち上げることさえできたのである。まさに一〇数年前には考えられなかったようなことである。この会でのいろいろな方々との出会いに感謝している。

会のゆるやかな継続のために

——「森の学校」のことなど

千葉 悦子

会についてこのごろ考えていたことがありました。いずれ奥田さんにお話ししてみようと思っていた矢先の突然の「解散」のお知らせでした。ぼやぼやしていたらこの会が消滅してしまうゾ……。各宗教内でフェミニズムの萌芽が育っているとはいえ、当会のような超宗教・宗派の全国組織はないのでは？また、クリスマスチャンなのに教会に行っていない私にはありがたい存

在なのです。)それで、この最終号にその私案を書き、みなさんにも読んでいただくことにしました。

私が次のようなことをひらめいたのはつい最近のことですが、思えば昨年十一月の例会終了後、七人ほどで渋谷「じよあん」に行き、講師を囲んでお酒を酌み交わしたことがどうも心に残っていたようです。通常の例会の他に、そんな場も大切ですよ。で、例会や会報を本流とするなら、傍流的ななにかが企画できないかなあ……。そんなことをつらつら考えていて、ふと、「森の学校」計画が浮かんだのです。

どんなものかといいますと、

- ・開催Ⅱ年に一度(夏か秋)、一泊二日
- ・場所Ⅱ山梨にあるうちの山小屋で
- ・趣旨Ⅱ勉強会と親睦

(第一部) 勉強会

会の創立期の方たちのパイオニア的な研究を後続の人間にお話しいただく。(例えば、フェミニスト神学の古典『教会と第二の性』を訳された岩田さんに本について解説していただきながら、岩田さんご自身がフェミニズムに出会われた経緯や今後フェミニスト神学に期待することなどを話していただく。)

(夜Ⅱ第二部)

庭でバーベキューなどして会員の交流を図る。

(翌日Ⅱ第三部)

参加者の現在の関心や抱えている問題について語り合い、意見交換の場に。

これは単なる一例です。私の他にもなにか提案をお持ちの方がいらつしやることでしょう。

みなさん、まず、会の継続の道を模索しましょうよ。七月の最終例会ではその辺も話し合いませんか。例会に参加できない方は千葉宛てに、是非ご意見をお寄せ下さい。

お待ちしておりますノ

〒157-0061 世田谷区北烏山2-3-1-309

Tel&Fax 03-3307-9470 (千葉)

節目のときに

宮澤 邦子

十六年ほど前に、何かに押されるようにしてこの会に参加したのは、ちょうど発足のころだった。関東と関西、仏教とキリスト教を、いわば二本の柱にしてはじまった活動だった。関東での第一回の会合には、八名ほどが集まったと記憶している。全員が違った立場、宗派から来ていたのは、今にして思えば、開かれた、門戸の広いこの会を象徴することだったかもしれない。

集まったメンバーは、関心も、問題にしていることも、それぞれ皆違っていた。当然、とまどいもあったし、問題を共有する同士の話し合いの持つ深まりには、なかなか進んでいかなかった。しかし反面、自分の立場、問題意識、スタンスを、客観的に位置づけていくには、たいへん役に立った。

本務校が地方の大学だったこともあり、その後の会の活動にはあまり役に立てなかったけれど、この機関誌のスタートには、いくらかの思い出がある。表紙のデザインや体裁などに頭をしばったこの誌上で、会との関わりの中ではつきりしてきたことのいくつかを、

会を終えようとする節目のときにあたり、書いておきたい。この会での体験が自分にとって（できればほかの会員の方たちにとつても）意味ある経験となるように、次のステップにつながるように——との祈りをこめて。

第一は、私にとつては、「宗教がフェミニズムである」ということ。二つは対立するものでも、二束のわらじでもない。まさにピッタリ重なるものなのだ。（この点については二〇〇一年四月の例会で話をさせていただったので、出席された方には重複になることをお断りしておきたい。この会するときには、何人かの方に「よくわかった」と言っていただけだったので、少し心が軽くなりました）

私はカトリック教会に行き始めてまもなく、（こういう言い方をしてよければ）何度目かの神との出会いを体験した。カトリック教会にいろいろ問題があるのはわかっているけれども、神との親しい交わりのノウハウという点で、なかなかいい伝統をもっているのは事実である。

その交わりの中で、カトリック用語で言えば、フェミニズムへの「召命」が来たらしい。もちろんこれは、たいへんに理解しがたいことである。なにしろ、教会組織も、神学も、女性差別を容認、正当化しているの

だから。私自身、それを受け入れるまでに、ずいぶん時間がかった。

教会内には相談相手はいなかった。司祭たちは、ごまかし、はぐらかし、無視し、それがうまくいかないときやつきになって否定しようとした。女性信者の中でも、フェミニズムや、女性差別は禁句に近いものだった。

そんなときイタリアを旅行した。翻訳をしていた本の関係で、修道会を訪ねたり、泊めてもらったりする中で、ちよつと知りすぎたと思う。組織の内部の知らなくてもよかつた実状を。

それは四分の一世紀を隔てた今でも、まだ具体的に書きたくないような体験だが、その「こころ」は、「在日韓国人女性の解放の視点」(一九八六年六月のシンポジウムの記録『フェミニズム・宗教・平和』収録)で申英子さんの言われた「一緒に食卓につかせもしないで、聖餐式だけ祝って何になる」とびつたり呼応している。

その後も、かなり時間はかかったが、薄紙を剥ぐようにして、自分の道があきらかになり、「宗教がフェミニズムである」を受け入れていったと思う。

なぜ宗教がフェミニズムか？神との出会いとは、私が全面的に肯定されるということだから。大学を出る頃からいよいよごまかしきれなくなった「女性である

ゆえの生きにくさ」を含めて。

全面的とは英語のホール (whole)、本質において、欠けたところが無いものとして受け入れられることである。それを、表面の衣(性別、人種、その他)によって半人前とか、二級市民とか、仕えるものとか決めつけることに、本質、原理である部分が生きにくさを感じ、憤る。ゆえに、生きにくさは神と共有しているものであり、憤りは聖なるものである。

第二に、この道をひとりで——この会で志を同じくする得難い友人たちとの出会いがあつたとはいえ、基本的にはひとりで——歩きながらここまで来た結果言えるのは、信仰というもの(組織忠誠、心ではなく、神との交わりという意味)は、フェミニズムを生きることによつて深まることはあつても、失われるところではない、ということだ。この点について、恐れることはないと確信を持って言える。

あなたや私という人間の意識を、ある時間、ある場所に灯す宇宙の法、第一原理、原動力が愛なのだ。愛以外の原理があるわけではない。その原理は人間の考える善も悪も抱擁してしまうスケールをもつと感じている。

そしてもうひとつ、この原理に沿って生きるということは、その原理と共に答えを探っていく生き方をすることであつて、クイズの答えのように、どこからか

出来上がった回答が降ってくるのを待つのではないということである。だから自分の生きることがおろそかにできなくなる。

言ってみれば簡単なことなのだが、納得するにはやはり長い道のりが必要だったと思う。ことは明快なのだが、なにぶん二千年の歴史の幕、あるいは厚い霧が覆い隠している。すつきりとはいかない。

一九八七年刊行の『フェミニズムと宗教』第一集のパンフレットに、カトリックとフェミニズムについてまとめたときも、別の人格を作って辛うじてできたというくらいには骨の折れることだった。(早川あゆみは私のペン・ネームです)

第三に、女性の場合、宗教による解放と宗教からの解放がセットになることがどうしても必要なのではないかということ。ややこしいのは、宗教が女性のために指定席を設けていることである。そこにはまっつしまうと、なかなか面倒なことになる。

宗教なるものは、神との出会い、そして交わりという目的地向かう汽車みたいなものだと考えている。目的地向かうなら、乗り物からは降りるものだ。鉄道マニアならいざ知らず、いつまでも乗っけていてもしょうがない、と私は思う。

さらに、この点について私は「穏やかな改革」なるものを信じない。システムは手つかずのまま残して、

組織の隅の方に(たぶん外側に差し掛け小屋でもつくって)そこに居場所を与えてもらう、みたいな形でのフェミニズムなら無いほうがむしろ。もちろんこれは私の選択で、他の人に押しつける気はさらにないけれど。

こうしてまとめてみると、この会の三つのキーワードのうち、「平和」が抜け落ちていることに気づく。関心の中心が宗教における女性差別であったのと、平和につながる活動は、わずかではあるが、他の場で行うことが多かったためと振り返って思う。

現今の情勢を見ると、国内的にも、世界規模でも、平和の問題が本当に待った無しに迫って来ているのを感じる。そして平和を脅かす原因を作っているのが、多くの場合宗教対立であることを考えると、三つのキーワードでやってきたこの会の活動をひとまずここで解散して、別のスタンスを取ることを考えてみるのもいいのかもしれない。何処で、どのように、がこれからの課題になりそうだ。

(二〇〇二年五月十五日)

草創の頃のことなど

岩田 澄江

私は一九八四年から八五年夏まで米国にいて、その滞在の終わりごろに、奥田暁子さんから手紙を受け取った。つい最近それが出てきて、これはとっておかねばと思ったのに、今探してみるとどうしても出てこない。そのため正確な引用はできないが、それまで彼女が主宰していた、AACW(Action for the Access of Concerned Women)に代わる新しい会を始めたいので、協力してほしいということだった。

一九八九年一月がベルリンの壁崩壊なので、一九八五年といえは冷戦の末期であったことが今ならわかる。当時の米国で私は平和運動をしている人々とかなり親しくしていたし、フェミニズムが平和運動と結びついていることが多いことを目にしていった。キリスト教の中のフェミニストたちの関心も努力も、米國とソ連の武力衝突を何としても回避したいというところにあった。だから奥田さんにもそういう認識を書き送り、「平和」の視点を入りたいと言った。

それからの細かいことは余り記憶にないが、ここに一枚のページ色のビラがある。「フェミニズム・宗教・平和」の会 発会記念講演シンポジウムとあり、その左下に円くかこまれた河野信子さんの写真があつて、右横に次のように書かれている。「女性の視点から宗教を再検討することによつて、私たちは果たして新しい地平を開くことができるだろうか。また、現代における救いとは何か。既成の考え方・枠にとらわれずに、女性のスピリチュアリティを共に考えあうこのフォーラムに、皆さまの参加をお待ちします。」日程は六月一日(土)午後二時一五時、場所は飯田橋・東京都婦人情報センター、演題および講演者は「女性と宗教」河野信子氏、シンポジウムは「女性と宗教——河野信子氏をかこんで」で、申英子、板谷翠の二名がスピーカーとして記されている。

これが一九八六年六月の集会であつた。それから、いろんなことがあつた。私は一九九二年以降はとても忙しくなり、例会にもめつたに出られなくなつてしまったが、それまではかなり深く関わつたように思う。朝早く並ばねばならない例会の会場予約や、講師を探して交渉するなどである。多くの新しい友ができ、さまざまな課題をフェミニズム、宗教、平和の切り口から語り合つた。その間、新しい人が加わると同時に、

当然ながら去っていく人もあった。だが、このような課題について、特に宗教については希薄な関心しかもたないこの国のフェミニズムにあつて、Womanspiritのような発表の場があることは貴重だった。手を引きたくなる時もあったろうが、女性たちの間での対話を求めてやまない奥田さんが中心にいたおかげで、ここまで続けてこられたのだ。

何かを止めるには決断がいるし、今まであつたものが消えるのは淋しい。しかし、自分たちの手で終止符をうつということは、良いこと、潔いことではないか。もし必要ならば、若い人たちがまた、新しい何かを始めてくれるだろう。

「フェミニズム・宗教・平和の会」

解散にあたって

奥田 暁子

フェミニズム・宗教・平和の会が発足したのは一九八六年一月だったから、今年で一七年目に入った

ことになる。解散に当たって、これまでのことをざつと振り返っておきたい。この会が発足した一九八六年当時、すでにフェミニズムは揶揄や嘲笑の対象ではなくなっていたが、宗教の世界ではフェミニズムはまだ新奇な目で見られていた。わたし自身もそれまでの一〇年間、自分の住んでいた地域を拠点に、小さな組織を作って、フェミニズムの視点からの活動をしていた。しかしその活動に「宗教」を持ち込むことがなかなかできずにいた。多くの宗教は性差別思想を内包してきたから、フェミニストからは、宗教を信じているというだけで、反フェミニズムと見なされていたし、一方、宗教者の側からはフェミニズムは異端の思想、跳ね上がった女性の運動や思想と見なされていた。いずれにしろ、当時は宗教とフェミニズムを並べることには違和感がつきまといっていたと思う。

この会が誕生するきっかけとなったのは、国際婦人年最終年の一九八五年に、ナイロビで開催された世界女性会議である。この会議でフェミニスト神学をテーマにしたワークショップがいくつも開かれているのを知って、一緒に参加した京都の源淳子さんと話し合い、宗教とフェミニズムに関心を持つ関東と関西の女性たちで会を立ち上げようということになったのである。当初は関東と関西に二つの拠点を持つかたちで五年ほど経過したが、その後、関西の拠点が解散

し、一九九一年から会は一本化された。この年は湾岸戦争が起こった年であり、再出発の第1号となった11号には湾岸戦争について書かれた論文がいくつか並んだ。そして終刊号を発行する今年は、奇しくも9・11以後の世界情勢に危機感を抱く状況の中に私たちは置かれている。私たちが会の名前の一部にした「平和」には、まさに戦争を含むあらゆる暴力を否定し、そのためになんらかの活動をするという意味が込められていたのだが、この点に関しては、残念ながら会として統一した行動をとることはできず、個人の活動に任せられた。

今日、宗教界にもフェミニズムは受け入れられるようになった。キリスト教だけでなく、仏教や天理教の世界でもフェミニズムの視点からの集会や研究会が持たれるようになった。宗教とフェミニズムが相反するものではないこと、信仰を持ちながらフェミニストであることは可能であることが、ある程度は理解されるようになった。フェミニストが宗教を敵視することも、かつてほどではなくなった。その意味ではこの一六年間に大きな変化があったと言えようか。

しかしこのような現象はまだ一部にとどまっている。フェミニズムを語ることができるのは宗教界のごく一部においてであり、宗教界全体としての立場は今も反フェミニズムであろう。なにしろ、宗教には数千

年の歴史があり、その間に男性中心の教義や制度が確立し、宗教が醸成した価値観も人びとの意識に浸透している。

五月の連休にベトナムに行つて来た。解放後二七年目のベトナムは社会主義を標榜しながらも市場経済まっさかりで、日本の戦後を思わせるような混沌と無秩序の渦巻くエネルギーに溢れていた。今も残る戦争の傷跡からは多くのことを考えさせられたが、今回はベトナムのことはひとまず置き、一緒に行つたある有名な市民運動団体のことを書きたい。と言うのも、一週間行動を共にして、市民運動の原点のように言われるこの組織がまったく男性中心の組織であることに驚かされたからである。女性の役割は「マドンナ」か「秘書」、「主婦」か「嫁」であり、男性の活動家を女性が支えるという構図が見事にできあがっている。官僚組織や大企業のような男社会ならともかく、少なくとも反体制を掲げるこのような組織にも性別役割分業意識が強固に存在しているのを知つたのはショックであつた。これはどこかで出会つた光景ではないだろうか。そう、フェミニスト運動が起こる前の光景である。アメリカではフェミニズムは体制を批判する市民運動に参加していた女性たちが、運動を共にする男性のセクシズムを批判したことから始まったはずだが、これは日本のフェミニズムには当てはまらなかったのだら

うか。一九八〇年代に日本で大きな運動となった反核運動が次の世代に継承されず、いつの間にか消滅してしまったのも、この伝統的な男女の構図を超えられなかったからではないだろうか。

わたしはこれまでフェミニズムは日本の社会にある程度受け入れられたと思っていたが、それはアカデミズムの世界の話だけで、もしかすると一般の社会にはほとんど浸透しなかったのかもしれない。それとも、浸透しなかったのは中高年世代だけで、もつと若い世代は違うのだろうか。そうであって欲しい。

男性の意識を変える最も大きな要因は、法や制度の改革ももちろん重要だが、身近な女性からの異議申し立てであろう。なぜ日本の女性たちは異議申し立てをしないのか。彼女たちが優しいから？女性の自立が困難だから？いろいろ理由は考えられるが、女性たちが旧来の道徳観やそれに裏打ちされたイエ意識に縛られていることも一つの大きな原因だと思う。このような道徳観をつくりあげる上で仏教、儒教、キリスト教などの宗教はかなり大きな役割を果たしてきたのではないか。宗教は日本では見えない存在であり、ふだんの生活のなかで宗教を意識する人はほとんどいないが、宗教に無縁に見える人もそのような道徳観から解放されていない。

そのような伝統的な道徳観から女性を解放してくれ

るもの、それがフェミニズムであった。キリスト教の道徳観（やはり、女性には男性を支える役割を期待し、良き妻・母となることを教えてきた）から欧米の女性たちを解放したのもフェミニズムであった。だからこそ、フェミニスト視点からの宗教批判はフェミニズムにとつても宗教にとつても重要だとわたしは確信している（フェミニズムにとつて宗教批判が重要なのは、社会学の視点だけでは現状分析には有効でも、人びとの価値観や意識といった長期的にしか変動しない部分を解明するには不可能だと思うからである）。

最近アメリカでカトリックの聖職者による性暴力が明るみに出て、大きな議論を巻き起こしているが、このようなことは今初めて起こった問題ではなく、やつと表面化したということだろう。日本の宗教界でも同様の問題はたくさんあると思う。わたしも何件かそのような事例を聞いたことがあるし、実際にセクシュアルハラスメントの被害者であった仏教者から相談を受けたことがある（しかし、彼女は公にすることには否定的だった。家と職業が一緒になった仏教者の場合、仏教界の不祥事を公にすることはすべてを失うことを意味するから、とてもそんな冒険はできないだろうことは理解できる）。その点で、自身が僧侶である渡辺典子さんによるセクシュアルハラスメント告発は相当な覚悟をもってなされたのだと思う。彼女の闘いが日

本の仏教界に対する大きな問題提起となつて欲しい。

さて、いろいろ考えてくると、この会が役目を終えたとはとても言えないのだが、同じ人間が会の中心であり続けることは組織をマンネリ化させるし、活力も失われる。この一六年間にはメンバーの入れ替わりもあつて、関心の対象も変化している。「新しい酒は新しい革袋へ」という言葉もあるように、新しい方々によつて新しい動きが出てくることを期待したい。

最後に、この会を今日まで支えて下さつた会員のみなさんに感謝したい。原稿の執筆を通して、また例会や編集のための仕事を通して、多くの方々に協力していただいた。とくに毎号欠かさず、しかも必ず締め切りの数日前までに原稿を送つて下さつた河野信子さんにお礼を申し上げたい。非常に新しいテーマで私たちの想像力を喚起していただき、連載を楽しみにしていた読者も多かったのに、解散により、中断させてしまうことをお詫びしたい。

この最終号の編集は小松、山下、奥田が担当しました。すでにお伝えしたように、会の残金は今号の印刷費と郵送料に充てましたので、ご了承下さい。最後の最後になりましたが、これまで長期にわたつて、良心的な価格でこの少数数の印刷を引き受けて下さつた(株)オクノプリント社にお礼を申し上げます。(奥田暁子)

フェミニズム・宗教・平和の会の解散に伴い、今後同種の会にアクセスしたいと思つていらつしやる方々のために、フェミニズムと宗教に関わる活動をしているグループや個人を紹介します。(編集室)

1. 日本フェミニスト神学・宣教センター

一〇年来の夢であつた日本フェミニスト神学・宣教センターは、二〇〇〇年一月二二日に発足記念会を持つて正式の活動を始め、すでに丸二年が過ぎました。「フェミニストの視点と価値観に立つて、神学と宣教を統合し発展させることを意図」し、この主旨に賛同する女性および男性によつて構成されています。現在会員として登録されているのは、約一〇〇人余りです。センターの活動では、「女性と男性を対置させるのではなく、父権制の社会構造をこそ問題と捉え、これにチャレンジして世界を変えていこうする政治的視野と社会文化的姿勢を基本に」、「性・人権・階級などによる差別や、宇宙・地球の環境破壊など、現代社会の抱える様々な問題の根底に、父権制的な価値観や構造を見据え、これにチャレンジする姿勢」を取っています。

これまで、隔月に定期的な会合を催してきました。定例セミナーでは、さまざまなテーマに基づいて、メ

ンバーやその他の興味を抱いておられる方が聖書テキスト解釈を取り上げたり、関わっている神学的宣教的活動について報告したりします。たとえば、二〇〇二年五月二五日には、第11回目が開かれ、「ヴォランティアの神学・矯風会ステップハウスから」と題して一色義子さんの発表、野村羊子さんの応答、そしてグループ全体のディスカッションが予定されています。毎年、七月には、夏期集中講座を開きます。今年も、七月二七日、「女性聖職者——過去・現在・未来」をテーマに、現場からの声に耳を傾けると同時に、聖書は何を語っているかを探る予定です。一月の会合は、新しい礼拝の形を求めて創造的なリタジーを共に創りあげ、そのあとのパーティで、参加者同志の親睦を深めています。

会場は、日本聖書神学校（新宿区下落合三一一四一—一六 TEL〇三—三九五—一〇一）です。定例セミナーは、第四土曜日の午後三時三〇分から五時三〇分、七月および十一月の会合は、午前一〇時から午後五時に開催されています。

各会合の様子は、「日本フェミニスト神学・宣教セミナー通信」に載せられ、地方におられる方々との交流の目的もかねて、隔月に発行しています。海外にも活動を発信したいとの希望を叶えるために、英語による通信も発行しています。

（共同ディレクター・絹川久子 記）

連絡先

〒178-0061 練馬区大泉学園町二—二三—五四

日本基督教団大泉教会内

TEL 〇三—三九二—三二一四

2. 女性と仏教 東海・関東ネットワーク

連絡先

〒142-0042 東京都品川区豊町四—一九—五

鶴巻荘、瀬野 美佐

3. 中野優子さんがやはりフェミニズムの視点から仏

教の研究と活動に取り組んでおられます。

連絡先

〒956-0845 新津市金津279

高岩寺、中野 優子

TEL & FAX 〇二五〇—二五一—四四〇

e-mail nakano@rio.odn.ne.jp

4. 天理教に関しては金子珠里さんがシンポジウムや

研究会の企画を担当していらっしゃいます。

連絡先

〒632-0033 天理市匂田町四七一—一

おやさと23号館三〇八 金子 珠理

TEL & FAX 〇七三六—二—二五七四

e-mail ugk77151@nifty.com

Womanspirit No. 34

2002年6月発行

発行 フェミニズム・宗教・平和の会

連絡先 〒180-0014

武蔵野市関前5-5-25

T / F 0422(53)8746

E-mail Akikovv@aol.com

<http://www.josei.com/womanspirit/>

郵便振替 00170-9-8031

印刷 (有)オクノプリント社